
黒き女神が秘めし森と民

璃慧紗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒き女神が秘めし森と民

【Nコード】

N0776P

【作者名】

璃慧紗

【あらすじ】

町ではこんな噂があった。

黒を持つ珍しい民が存在するらしい。その民は神格を持った者の加護を受け、〈護り〉と〈治癒〉の力を持っている。そして、その民が持つ物は国一つに値するぐらい価値があり、もちろん、その民自身もかなりの価値がある。しかし、その民の数は少なく、滅多に姿を現さない。その民はなんでも、黒色の森に住んでいるらしい。。。。。

その世界の住民はさまざまな姿をした神格を有する者に加護を与えられる。髪、瞳、肌の色は誰に加護を与えられたのかで違いがある。

この話は、神格を持つ女神と周りの世界の物語。

1話：女神の誕生（前書き）

初めまして、璃慧紗と申します。

このたびは、私のような者の小説を読んでくださり、ありがとうございます。
ございます。

1話：女神の誕生

数え切れないほどの木々が並び、木漏れ日が降り注ぐ森の中。その森の中心にそれはあった。

他とは比べものにならないくらい太い幹。大きく広げられた枝は全てを護ろうとしているかのようで、どこか安心感を感じさせる。歳月が感じられるような大木だ。

森の地面は白。そこに生える木は幹が透明感を感じさせる黒、葉は底が分らないくらい深い闇色に染まっている。それもそのはずだ。なぜなら、この森の主であり大木、もとい神木に宿っているのはその黒を纏っているのだから。

彼女はゆっくりと意識を浮上させた。地面に付くかと思われるほど長い髪。光を湛え、それでいて何かを感じさせる瞳。壊れるのではないかと思ってしまうほどの白き肌。黒と白、対極にある色を持つ彼女はまさしく女神と言うべき姿だった。

彼女の足が地面に立つと同時に肢体に影がさし、いつの間にかその身にふさわしい黒い地に裾に白い線が入ったドレスを身に着けていた。

彼女の唇から小さく息が漏れた。

「ああ……。実体化するのは初めてだね。」

そういつて彼女は髪を揺らしながらあたりを見回す。森は相変わらず静かだったが、声無き声で嬉しさを表しているようだった。そ

れは、当たり前のことかもしれない。何せ、木々たちの長ともいえる大木が神木となり、女神が生まれたのだから。

「初めまして、木々達。我は木の姿の時も貴方たちと共に在った。けれども、神格を得、〈護り〉と〈治癒〉の力を持った。これからは、神格を持った者として、貴方たちと共に在る。貴方たちは最早我の一部。我は、この黒き森を我らの〈聖地〉とし、女神なることをここに宣言しよう。」

女神・・・女神・・・我らが長・・・我らは聖地・・・

森の声が聞こえてくるようだった。皆が皆、女神の誕生を喜んで
いた。

1話：女神の誕生（後書き）

主人公は女神です。これからだんだんとキャラクターを増やしていく予定です。

誤字・脱字がありましたらお教えください。

2話・風の舞（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

2話・風の舞

森を抜ける風は彼女の髪を揺らす。その風によって、湖は波紋を作り出す。

森の中にある大きな湖。その中心あたりにたつのはこの森の長である女神。

「風よ、風達よ。汝らは、どこへ向かう？ はるかなる大地のその先か。端の見えぬ大海原へか。それとも、我ら森の聖地にか。」

彼女の歌は風に乗って消えていく。そして風は答えるように音を鳴らす。

私たちは全ての場所からくる・・・私たちの行き着く先は定まらず・・・されど、私たちは森の聖地を休息の地とする・・・

それを聞き、彼女は口元をほころばせた。

「それでは森は、汝らを歓迎しよう。我らはく護りくくとく治癒くをもつ。汝らに、静かなるく護りくくと平穏と言つくとく治癒くを与えよう。さあ、風達よ、我らと共に舞おう・・・」

彼女の足元で水が弧を描く。風が地面に落ちた葉を飛ばし、水に波を作る。

いつしか、周りの木は枝を揺らしまるで風の音にあわせるかのよう
うに動いていた。

「いまだ我らが加護する者はいない。ああ、世界はどう変わって
くのだろうか……。」

女神の声も風の舞の中に溶けていった。

2話・風の舞（後書き）

いまだ人間は登場しません。もう少し……のはずです。

誤字・脱字がありましたらお知らせください。

3話・癒しの実（前書き）

続けて投稿しています。

私の違う作品と並列して書いておりますので、遅くなるかと思いません。

3話・癒しの実

それは森の端まで届くのでは無いのかと思うぐらいの香り。

黒い葉をつけた白い果実は、森の一角に数本の木に実っていた。

「あら・・・木よ、これはお前達の実だね？」

そこにあらわれたのは女神。枝から果実を一つ採り、その香りに目を細めた。

この森の長である彼女は森のことはすべて知っている。何故、実が出来たのかも彼女は知っていた。

「良い香り。とうとう、人間達のための準備を始めたのか。これならば、人間も満足するだろう。」

その言葉に木は嬉しそうに枝を揺すった。

「嬉しいか。それはよかった。お前達が反対すれば、人間を迎えるのも先延ばしにしてもよかったのだけれども。お前達がこうしてやってくれるのだから、私もそれ相応のことをしなければならぬだろうね。」

そういつて女神は力を行使した。

「我は力を行使する。これらの果実に＜治癒＞の力を与えよう。病をなおし、傷をふさぎ、苦しみと痛みをなくす力を」

木々が白色の光に包まれた。光が消えると底に現れたのは前よりも幹が白く染まった木々。

それを見て、女神は満足そうに笑った。

「さあ、木達よ。その実で＜治癒＞の力を人間に与えておくれ。」

木々は了承の意を表し、うなづいた女神は静かに立ち去った。

「もうすぐか・・・我らの加護を受ける人間があらわれるのは・・・」

彼女が言った言葉は、果実の甘い香りと共に、何処かへ流れていった。

3話・癒しの実（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

主人公の一人称は「我」、もしくは「我ら」です。森は彼女の一人なので、彼女一人ではないという感じですが。

誤字・脱字がありましたらお知らせください。

4話・予兆届けし鳥（前書き）

遅くなりました。申し訳ありません。

4話・予兆届けし鳥

木の上をリスが走り。木の根元に作られた巣からは、ウサギの子供が顔を覗かせていた。

森の中はさまざまな動物達の声で溢れ返っていた。

と、その時。森が一瞬静まった。

いつの間にか現れ、木の枝に腰かけていたのはこの森の女神。その姿を捉えた動物達から嬉々とした声が上がった。

「おはよう、我らが森の同胞達。とうとうお主らも現れた。時期がきたようだね。」

その声に答えるように子リスが彼女の幹に添えられた手の近くで一声鳴く。そして、ポトリと木の実を落とした。

「おお、実りをくれるのか。ありがとう、小さき同胞。受け取るとしよう。」

次の瞬間、彼女の手のひらにあったはずの木の実は無かった。そ

して、ふわりと重さを感じさせぬ動きで木から下りた。

「さあ、どうしようか。同胞よ、汝らは、死が訪れればこの地に来る人間の食料となる。故に我は迷っている。汝らに力を与え、この森のものとするかどうか。今ならば、出ていってもかまいはしない。汝らは、どうしたい？」

その声はいつになく真剣だった。それは当たり前のことだろう。これから共に過ごしてゆく生き物たちに、お前らが死ねば人間に食べさせることになるのだと言っているのだから。

動物達の行動はみな同じだった。誰も、この森から去るという意思を出さなかったのだ。つまり、ある者は体を折り平伏し、またある者は足を突き、女神に従うことをあらわした。

それを見て、女神は悲しんでいるのか喜んでいいのか分からない複雑な表情を見せた。

紅を刷いたような唇が動かされる。

「汝らの意思、確かに受け取った。ならば、我は神格を持つものとして、汝らに捧げよう。」

すっ……と、手が動かされた。

「我は力を行使する。その身は鋼よりも強靱に。その心は月のごとく清らかに。」

さあ、その身に〈護り〉の力を与えよう。汝らは力によって、森の番人となる。黒の同胞よ、我らと共にあろう。」

彼女の目の前にいたのは黒い動物達。リスもウサギもクマも狐も、全ての動物が大半が黒を占め、白が混ざった体を持っていた。

森のなかに、動物達の歓声があがった。

#####

バサバサ・・・と羽音を立てて、黒いハトが女神の伸ばされた腕に止まった。

動物達が黒を纏ってから数日。森の周辺を舞っていたハトが外の国の情報を持ってきた。

「おかえり。それで、外の世界はどうだった？・・・そうか、戦争をしている国ばかりか。神格者がいても性格もさまざまだ。仕方あるまいて。しかし、それによって加護持ちではない者が現れるのだから、世界は本当に分からないものだ。・・・ああ、お前は巢に帰って翼を休めるといい。ご苦労だった。」

ハトが飛び立つと、女神はゆったりとした歩調で歩き始めた。

「時がきた。世界が移り行く中で、我らもまた、新たな道へ行こうぞ……。」

動物達の声と共にその声はいつしか混ざり合っていった……。

4話・予兆届けし鳥（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

次回は人間側の視点かも・・・です。

誤字・脱字がありましたら教えてくださると嬉しいです。

5話・＜幕間＞ある国の者達の会話（前書き）

今回は人間サイドです。

5話・＜幕間＞ある国の者達の会話

- 兵士達の会話 -

簡素な小屋で数人の男達がテーブルを囲み、談笑していた。片手にもっているのは瓶に入った酒だ。男達は色の濃さに差はあれど、全員が髪と瞳が蒼く、肌が蒼色がかった。

「なあ、知ってるか、お前ら？」

その中の一人の髭を生やした男が会話が途切れたところで口を開いた。

「なんだ？賭け事の仕方なんて知らないぜ。俺らの国と相手の国の勝敗なんて、決まっているようなものだからな。」

他の男達がつられて笑う。それでも、髭面の男はかまわず喋った。

「そうじゃない。この国から少し離れたあたりに、新しい聖地ができたらしい。」

それを聞いた男達は大きく目を見開いた。それほどまでに、その情報は衝撃を与えるものだったからだ。

「それは本当か！？おい、お前はいつそんなことを聞いたんだ。」

「そうだ、それは俺らみたいな兵士に明かされるものじゃないだろう？」

思わず詰め寄った仲間を宥めるように、男は話を続ける。

「俺らがこの見張りの任務に着く前だ。軍のお偉いさんが話しているのを偶然、書類を届けた時に聞いてな。聖地が、今から数ヶ月前に現れたと俺らの国の<蒼狐そご>様が仰ったらしい。」

「そうか……。それじゃ、加護持ちでない者は国を出られるんだな。俺らの国は戦争ばかりしている。危険のない聖地なら、俺らも安心して任務を遂行できる。」

「ああ。俺らはすでに加護をいただいているから神格者様のお許しが必要れば国を出られないが、国が亡くなっても生きていける。だが……。すでに加護を頂いている老人達はだめだろうな。国と共に死ぬだろう。」

彼らにとって気がかりなのは国にいる者達のことだった。自分達の未来は決まっただけでも、国にいる者達は未来が分からない。しかし、彼らに出来ることは少なかった。いや、やるべきことは

「だから俺達は必ず任務を成功させなくてはならない。どんな結果になってもだ。」

男達の中で年長だと思われる男がそう締めくくった。

それを皮切りに、会話の中に笑いが混じりだす。男達の顔には一様に決意が浮かんでいた。

二日後。赤炎を纏う石壁を持つ国は蒼色を持つ男達により壁の一部を破壊、人民の5分の1を失った。

三日後。蒼の国の監視小屋に敵国の爆弾が落ちた。死体は見つかっていないらしい。

しかし、このことから王族が逃げ出すという醜態をさらし、軍は崩れ、国内にも戦火が広がった。結果、神格者は聖地を荒らされたため消滅し、まだ年若い者達は国をでる事となった。

#####

・町の女性達の会話・

その国の者達の格好は肌が見えるくらいの薄着だ。一見、明るい格好かと思われるが、人々の表情は皆同じくらい暗い。そして、どこか急いでいるようだった。

人々が行きかう道は多くの店が並んでいた。その端の方の店で、女性二人が喋っていた。

「避難のための準備は終わったのかい、ライラ。」

店の店主だと思われる女性が赤がかった腕で綺麗な髪飾りを動かしながらまだ若い女性に問いかけた。

「もう大体のものはつめ終えたわ。おばさんは？」

ライラと呼ばれた女性は肩より少し長い紅の髪を揺らし、髪と同じ色の瞳だった。そして、自分とほぼ同じ色の店主に聞き返した。

「ウチはもう少しかかるね。身重の娘と孫が二人、荷物が多いんだ。」

「手伝いしましょうか？」

「いや、だいじょうぶだよ。あんたも小さい息子の世話があるだろう？ さつさと家に帰って一緒にいておあげ。・・・あとのくらいかわからないんだから。」

「・・・そうね。でも、大丈夫よ、おばさん。噂では、新しい聖地が近くに出来たらしいの。目的地があるから、多少のことは問題ないわ。おばさんもいくわよね？」

「そのつもりでいるよ。神格者様が受け入れてくれるといいのだけれどねえ。・・・この国はもう駄目だろうからね。＜紅犬こっけん>様がいらっしゃるのに、近くの国に宝石ほしさに押しかけるなんて・・・。」

「そんなに考えちゃだめよ。今を受け入れなくちゃ、後の子達が大変でしょう？」

ライラが励ますように言う。それでも、彼女の声からは不安が隠せなかった。

「そうだね。時代の流れには逆らえないからね。・・・さあ、暗い話はここまでにして、そろそろお帰り。男どもがいらないんだから、子供と楽しく過ごさな？」

店主もライラの声に合わせるように出来るだけ明るい声で冗談交じりに言った。その言葉をうけ、ライラも笑顔で帰って行く。

「ええ、それじゃあね、おばさん。」

「ああ、また。」

この会話の数日後。

その国は突然の奇襲により、城壁が壊され、それによって起きた壁の崩壊で一部の国民が死亡した。しかもその中には奇襲に応戦した軍に属する王族がいた。結果、その国の王は怒り狂い、奇襲してきた国に爆弾を投入。しかし、神格者に精神の狂いから見限られ、王は死んだ。

相手の国の神格者が消滅したため、戦争は終わった。この国の神格者は自らの王族に対しての甘さを恥じ、国民に自由に国を出て行く許可を出した。

国民の中で幼い者のいる者達は国をで、その国には大きな変化を遂げることとなる。

5話・〈幕間〉ある国の者達の会話（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

次回も人間サイドだと思います。読んでくださると嬉しいです。

誤字・脱字がありましたらお知らせくださると嬉しく思います。

6話・現れた民（前書き）

遅くなりました・・・。申し訳ありません。

6話：現れた民

その集団は全員が女と子供だった。そして、すべての者の顔に疲労が浮かんでいた。

進んでいる場所は太陽が照り続ける砂漠。空に舞う鳥もいず、聞こえてくるのは吹きつづける風の音と人の呼吸する音だけだった。砂に足を取られながらもその者達は歩みを止めなかった。なにかを探すようにあたりを見回しながら、母親を思われる女達は幼子の手を引き、少女達は自分より大きな荷物をもって歩いていった。

しばらくすると、さらに強い風が吹きはじめ、さまざまな物が舞った。集団の足が止まることを余儀なくされ、飛ばされまいと荷物を抱え込む。

風が静まった頃。再び歩き出した集団の少年が地面に落ちていた黒い葉を見つけた。まだ加護を持たぬ白^{クリア}の少年だ。

少年は拾った物を自慢するように、葉を母親に差し出した。それを受け取った母親の変化は劇的だった。

「黒い葉・・・！ みんな、聞いて！ 聖地は近いわ！ 黒を持つ神格者様がいらっしやるのよ！ さあ、元気をだして、目的地が見つかったわ！」

喜びの聲が上がる。全員の顔に余裕が出始めたのを見て、その母親は嬉しそうに笑いながら、少年の頭をなでた。

少年が「どうしてみんなよろこんでいるの？」と聞くと、笑顔のまま答えた。

「聖地が見つかったからよ。風で飛んできた葉はまだ乾いていなかったわ。きつと、近くにあるのよ。ほら、手をつなぎましょう。頑張って歩くのよ。」

少年は言葉より母親の顔を見て理解したらしく、「うん、せいちまでがんばるよ。」と返事をした。

今度の足取りは前よりも軽くなっていた。そしてその胸には希望があった。

母親たちは子の加護のために。子供らは母が求めるものへの興味から。

まだ見えぬ聖地に向かっていった。

黒。それがその集団が最初に思ったことだった。

木の幹も葉も。ときおり見える動物達も濃淡があつたがすべて黒色だった。

そして皆が理解した。ここが聖地なのだ。

集団の中で年長者の者が声をあげる。

「この聖地を治めし神格者様へ願います。どうかいまだ加護与えられぬ子供らを導きください。どうか、神格者様の聖地を心休められる場所と定め、民とさせていただけるとしてしてください。」

女性が喋り終えると、聖地の木々が動き始め、木のアーチを作った。

森に受け入れられたことを知った集団は恐る恐る進み始めた。

奥に進むにつれ、森の中に動物の音が満ちてきた。木の上をリスが走り、茂みからはネコのような生き物やキツネなどが覗いていた。

木々には白い実がなっているのもあり、それらを見つけたとき、子供らは歓声を上げていた。

そして、木のアーチが終わり。その先に見えたのは、他の木とは

比べ物にならないくらい大きな木。

それが何なのか分かった母親は我が子とともに平伏した。

そして・・・女神が現れた。

「ようこそ、我の聖地へ。汝らが最初の人間だ、歓迎しよう。その者、名はなんと申す?」

声をかけられた女は下を向いたまま答える。

「私はアンナと申します、神格者様。聖地に迎え入れていただき、ありがとうございます。」

「アンナとやら。気にすることはない、我は神格を持つものとしてやるべきことをしたまで。さて、お主等の希望は子らに加護を、だな?」

「はい、そのとおりでございます。」

「ほう。では、この森に民として残るのは子らだけだ?」

「……!っはい。」

「駄目だ。」

「は……?」

子だけに加護を与えるということは母親達にとっては別れを意味していた。自分の命を捨てても護りたい命を女神は拒否するという。思いのまま顔をあげると、アンナの目に映ったのは、憂いを帯びた女神の瞳だった。

「お主等、親としての心はみとめよう。だがしかし、お主等なしで子が生きていけると思つか?お主等が消えたら最後、子らは食料を得ることも出来ず、の垂れ死ぬだろう。我の加護があっても、死はとめられぬ。それでも、よいのか?」

死……それは未来のある子供にあつてはならないことだった。子が死ねば、自分達は此処まで来た意味がない、と母親達は思った。しかし、このままでは

「しかし……供物を神格者様に捧げなくてはならないのでは!?!私達には私達の命しか、捧げられるものはないのです。」

「いや、命でなくともよい。そのすぐあとに最初の民の全員の命が来てしまうのだからな。だから我はお主らから、お主らの人生を供物としてもらう。」

「私達の人生・・・？」

「ああ。人生とは、人が生きてゆくことそのもの。我に人生を供物とすれば、お主等は一生この聖地からは出られない。選ぶがよい。死か、ここに縛られるか。」

その言葉は母親達にとって、願ってもいないことだった。全員がすぐにうなづいた。

「ありがとうございます、神格者様。」

「気にするな。これは私が勝手にやっていることだ。命はお主等が思う以上に重要なのだ。その変わり、お主等にはしっかりと動いてもらう。よいな？」

アンナはこの神格者に命を大事にする心があることに安心した。

前の国では、戦争をしていたのだ、そう思うのはあたり前かもしれない。そして、自分達、人と神格を持っていても驕らずに真剣に話をしてくれることも、嬉しかった。

「さて、では加護を与えよう。皆のもの、立て。」

その言葉に従い立つと、正面にあった神木から枝が伸び、何かを全員の手に落とした。

掴んだものは・・・幹の一部らしきものだ。

それを全員がもっていることを確認した女神は目をつぶり、ゆるりと腕を広げた。

「我は力を行使する。我等の民となるもの達に証を授けよう。証は身を護る<護り>となり、身を鎮<おさめる>癒し<癒し>となる。我はここに、加護を与えることを約した。」

木々がざわめいた。動物達は声をあげる。

女神が口を閉じたとき、そこにいたのは黒い髪と瞳、白い肌を持った民だった。

それぞれの体には、証が付いていた。

「我等の民。黒き民がとうとう誕生した。さあ。世界よ。どう変わってゆくのであるかな・・・?」

その声は喜びの声を上げる人の声とは別に、神木にしか聞こえないくらい小さかった。

6話・現れた民（後書き）

読んでくださりありがとうございます。相変わらずグダグダです。。。

証というのは、黒いガラスの破片のみたいなのが、人によって違う場所についてる、みたいなイメージです。

誤字・脱字がありましたら、お知らせください。

7話・民の生活（前書き）

遅くなりました・・・申し訳ありません。

読んでくださりありがとうございます。

7話・民の生活

森の中に十数件の家が立っていた。そのまわりには地面を耕して作られた畑や、子供らのための遊具があった。

と、そのとき、一軒の家から、一人の女性が出てきた。そして、あたりを見回していた。その目が、ある一角で留まった。

「ヨウ、ワイン、フィーア！いつまで遊んでるんだい、早くおいで！」

「あはは！」

「やだよ、アンナおばちゃん！」

「あと少し！」

上から順にワイン、ヨウ、フィーアだ。まさしく言っていることは違うが、三人全員がまだ遊ぶのだと言っていた。

「来ないと今日の夕飯に果物を出さないようにお前達の母さんにいっしょ！それでもいいんだね！」

それを聞いた子供たちの行動は早かった。木の間をぬって走る追いかけてここをやめて、女性の下にすばやく駆けてきた。

「よし、さあ、夕飯の手伝いをしておいで。まずは手を洗うんだよ。今日はみんなでの会食だからね。」

「「「はい。」」」

三人は返事をするのを確認して、アンナとよばれた女性は広場らしき場所を指差した。その場所は周りに比べて比較的広かった。

子供たちが走っていくのをみながら、アンナは支度をするため、家に向かって歩き出した。ちょうどそのとき、アンナの家の近くから若い女性が出てきた。

「さすがね、おばさん。私はああいう風には言えないわ。」

それにアンナは苦笑で返す。

「そんなことはないだろう？ライラ。それに、神格者様が受け入れてくださったんだ、自分達のすべきことをしないとね。今日の会食

は、別の国の人たちだしね。」

「そうね……。神格様が受け入れたんですもの、悪い人達ではないでしょうね。ある意味私達と同じように被害者なんですから、仲良くできるはずだわ。」

ライラと呼ばれた女性は笑いながら言った。

「さ、準備しましょう？神格様に差し上げる供物は、私が持つていくわ。」

「ああ、頼んだよ。」

「ええ。」

空はだんだんと暗くなり始め、広場には人が集まりつつあった。

7話・民の生活（後書き）

誤字・脱字がありましたらお教えください。

8話・会食の前（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

8話：会食の前

さらさらと葉を揺らし、枝を駆けるリス。風に髪を弄ばれながら、森の中を進む女性の姿があった。

しばらくして、まわりよりも大きな木、神木が見えた。神木の前まで来ると、女性は手に持っていた物を地面に置き、自身は頭を垂れた。

「神格者様、私どもの感謝の心をお受け取りください。」

ふわり、と風が吹き、神木が揺らいだ。

「そなた等の心、受け取ろう。娘よ、他のものとはうまくやっているか？」

「は、はい、森に住む者一同、助け合って生活しております。今宵は、会食を開く予定です。」

女性の答えに神格者である女神は満足気に笑った。

「そうか。ならば、よい。我等も祝そう。」

「ありがとうございます。」

「ああ、すでに空が暗くなってきている。道案内をつける、早くお戻り。」

「はい、失礼します、神格者様。」

女性は立ち上がり、森に向かって歩き出した。木々が動き、一本道を作る。月の光も底だけを照らしているようだった。それに驚きつつも、女性は静かに去っていった。

誰もいなくなった場所で、女神は語る。

「人とは難儀なものだ。生きていた場所が違うだけで争いを生む。さて、我も一役買おうか、神格を持つものとして・・・」

その言葉に反応したのだろう、数匹のウサギが跳ねてきた。他にも、さまざまな動物が集まってくる。

「ああ、お前達も協力してくれるか。我等の民に・・・」

動物達はが鳴き声を上げ、女神はよりいつそう、笑みを深める。

「時の流れは早いものだ。最初の民から、だんだんと集まってくる。さあ、我等と、我等の民に幸を。」

神木の葉が揺れ、女神がゆるりと舞う。月の光がより明るくなり、森全体を照らした。

8話・会食の前（後書き）

誤字・脱字がありましたら、お教えください。

9 話・詩い（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

申し訳ありませんが、受験生のためしばらく更新を休止させていただきます。

次の更新は二月下旬になるかと思われます。

9話：諍い

火がおこされ、料理が並べられる。まだ真新しいテーブルと椅子が用意されていた。

「今回は、親睦を深める、ということとで会食とさせていただきました。遠慮なく食べてください。」

アンナの声に同じテーブルの人たちが頷いた。しかし声は上がらない。

「えー・・・では、神格者様に感謝を、森の恵みと、命をくれた動物達に礼を。いただきます。」

食事が始まった。挨拶をしたのは全員、しかしその後の会話がなかった。

「どうします、おばさん。やっぱり、テーブルを別にしたのはまずかったかしら。」

同じテーブルでアンナとライラは顔を寄せる。

「といつてもねえ・・・向こうもなれていないから、っていう理由でこうなったし。子供たちは問題なさそうだけどね。」

「そうね・・・」

二人の視線の先には笑顔のテーブル。子供たちだけで構成されたグループはさきほどから笑顔が絶えない。やはりそこは子供らしいというべきか。

「まあ、今回は仕方ないね。また次回に、だよ。さ、ライラもお食べ？せつかくの恵みだからね。」

「ええ、もちろんよ。」

「だから嫌っていつてるでしょ！」

「・・・何かしら？」

突然聞こえてきた怒声。視線を向けた先では若い女性二人がらみ合っていた。

「なんで私が貴方の出した物を食べないといけないの!？」

「なっ!! 食べるとはいってないわ、薦めただけでしょ!？」

「どうしたんだい？」

アンナが声をかけると二人が同時に振り向いた。

「アンナおばさん! この子が、私が進めた料理をたべないの。しかも、薦めただけなのに逆に責められたわ。」

「何よ、食べるって言うからいけないのよ。大体、鳩は食べ物じゃないわ!」

「なんですって!？」

「あー、はいはい。落ち着いて。鳩を料理にだした私達が悪かったよ。お前さんの国では鳩は食べないんだろう?」

「ええ、そうです！鳩がかわいそうだわ！」

「これからは鳩の料理は会食ではなしにしよう。」

アンナの言葉を聞いて片方の少女は勝ち誇ったかのように笑った。

「けれども、」

「？」

「お前さんの国ではカタツムリの一種を口にするだろうか？」

「ええ。それが？」

「私達のいた国ではそれは食べ物じゃないんだよ。」

「えっ？」

「文化の違いがあることが分かっただろうか？それじゃ、仲直りしな。これから一緒に生活していくんだから。」

二人の少女が頷くのをみて、アンナは席に戻った。

「さすがね、おばさん。」

「そうでもないさ。こんなことがあと何回かはおきるだろう。文化の違いは面倒だね。」

「そうね。こればかりは仕方がないわ。」

次第に笑顔が見え始めた場所を月が照らし続けていた。

9 話・諍い（後書き）

誤字・脱字がありましたらおしらせください。

10話：旅立ち（前書き）

お待たせいたしました。更新を再開いたします。

キャラクターの名前などを募集したいと思います。できれば髪や肌の色も一緒だと嬉しいです。お気軽に感想にお書きください。

10話：旅立ち

森の入り口に大勢の人が集まっていた。

「気をつけていくんだよ。いつでも帰っておいで。」

「はい、いつてきます。」

歳若い少年少女が外にむけて歩き出した。時折振り返るが、その歩みが止まる事はない。

見送る者達はその姿がみえなくなるまでそこにたち、手を振っていた。

「案ずるな、我が民よ。」

森の奥から声が聞こえてくる。

「あの子らは我らの加護を受けている。加護はあの子らに希望をもたらすだろっ……。」

「さあ、若い子たちがいないんだ、私達だけでどうにかやっていくよ！皆、わかってるね！」

「もちろん。」

「はい。」

「了解です！」

あちこちから声が聞こえる。さまざまな国の生き残りが集まったこの森の住民は時が経つうちに一つの民となっていた。今では生まれた国が違つといった理由で争いが起きることもない。

住民がそれぞれの役割のために動き出し、村の広場に残ったアナは溜めていた息を吐いた。

「ふう……。。」

「アナナおばさん！」

「ライラ。どうかしたかい？」

「いいえ。・・・人が減った気がするわ。やっぱり、若い子がいないと明るさがないのかもね。」

「そうかもしれないね。まだ子供たちはいるけれど、働き手がいなくなっただからね。・・・まあ、仕方が無いね。若いうちは他を知ること重要だからね。」

「そうよね・・・。」

若い者たちが森をでた理由。それは世界を知るためだ。森は一つの閉鎖空間であり、知識には限りがある。そのため、成人を迎えた男女は森を出て、他の国を旅する。そして持ち帰った知識で森の人も育てようという考えがあるのだ。

「何年か後が楽しみね。それじゃ、私も仕事するわね。」

ライラが立ち去り、しばらくしてアンナも自分の仕事をするために立ち上がった。

「あの壁……国があるのかしら？」

「どうだろうか。」

「いってみてはどうだ？駄目だったらでてこよう。」

「そうね。」

乾いた大地を5人の男女が歩いていた。全員、黒髪に白い肌だった。

向かう先は、遠くにみえる壁。

10話：旅立ち（後書き）

誤字・脱字がありましたらおしらせください。

次回から視点が変わると思われれます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0776p/>

黒き女神が秘めし森と民

2011年3月2日20時34分発行